

アジ・サバ漕ぎ釣りについて

厳原町漁業協同組合青壮年部

佐須支部 支部長 谷本孝浩

1. 地域と漁業の概要

長崎県対馬は、東海と日本海を分断する海峡上に位置する、朝鮮半島と九州本土北部とを結ぶ古代からの要所で、沿岸を対馬暖流が流れ、ブリやヨコワ（クロマグロの若魚）が回遊する好漁場に恵まれる反面、主要出荷市場である福岡市とは海上距離 138km の離島であることから、流通の面で不利な地域である（図 1）。

厳原町漁協は、対馬の南端にある人口約 15,400 人の厳原町にあり、正組合員 430 名、准組合員 562 名の計 992 名で構成され、主に定置網、一本釣り、イカー一本釣り、曳縄、延縄、ブリ飼付け、シイラ漬け、採介藻等の漁業を営んでおり、年間総漁獲量約 3 千二百トン、総漁獲高約 23 億 6 千万円（平成 13 年度）の漁協である（図 2）。

2. 研究グループの組織と運営

厳原町漁業協同組合青壮年部は、漁業技術並びに水産に関する知識の向上、水産資源増殖の研究などを目的として昭和 46 年 7 月に発足し、現在 6 支部 47 名がそれぞれ目標を持って活動しており、私達佐須支部では、立縄、曳縄、すくい網等の複数の漁法を組み合わせた漁業経営の安定化に取り組んでいる（図 3）。

3. 研究・実践活動課題選定の動機

対馬近海では以前から、底物を狙った立縄漁やタチウオ曳釣り漁で大型のアジ・サバが混獲されることが知られていたが、これらを効率的に漁獲する漁法はなく、そのため新漁法の模索を続けていた。

このような状況の中、広島県の漁業者が対馬近海でアジ・サバを効率的に漁獲しているとの情報を入手し、平成 13 年 2 月、対馬地区漁業士会主催の講習会で、この漁業者から直接、アジ・サバ漕ぎ釣りの漁具の作成、操業実習の講習を受けることができた。

この漁法は、魚群探知機で魚群の反応を見つけ、多数のフラッシャー擬似餌のついた漁具を魚群内で曳くことでアジ・サバを効率的に漁獲するもので、既存の船の装備が利用でき、漁具制作費も数千円／鉢と安価で簡易に作成できることから、私達は直ちに、漕ぎ釣りを導入し、アジ・サバの出荷を目指した（図 4）。

4. 実践活動の状況および成果

① 漁具・漁法の改善

操業実習ではタチウオ曳釣り用の自動釣り機で操業していたが、装備していない船も多いことから、私達は、立縄用の自動釣り機をピシヨマが巻けるように改造して試験操業に臨んだところ、大型のアジ・サバを漁獲でき、早速、佐須支所管内で16隻の船が漕ぎ釣りを導入することとなった。

導入当初、小型のアジが大量にかかると、漁具が絡まり破損することがあったが、幹縄と枝縄の連結にサルカンを使用することで絡まりを大幅に軽減できた。

また、操業を重ねる中でフラッシャー系の色を変えることによって、アジ・サバの釣り分けができるようになった。

加えて、魚群探知機だけでなく、ソナーや潮流計を併用するなどの改善を重ね、平成13年3月中旬から5月末までの期間に500~1,500gの大型のアジ・サバを安定して漁獲することができたので、新しい漁業として成り立つとの印象を受けた。

漁法導入前の平成11年度佐須支所での漁獲量は、定置網漁を中心にサバ類が5,665kg、アジ類が1,129kgであったが、漕ぎ釣りのアジ・サバが新たに加わり、平成13年度は、それぞれ22,566kg、2,416kgと2~4倍の漁獲となった(図5)。

② 出荷方法の検討

アジ・サバは、市場の流通量により単価が大幅に変わる魚種であるため、他地区との差別化を図り、単価を安定させるためにも、出荷方法を検討する必要がある。

まず、私達は、船上において鮮度を保持する取扱い方法として、スレ防止のための針外しの使用、並びに、メ、血抜き、冷却を確実に実施するというを徹底した。

次に、氷の上に直接魚を並べる当初の出荷方法では、マサバの体表が白く変色する氷焼けを起こし、見栄えが悪くなることから、出荷時に水分を吸収する紙製の特殊なシートを魚と氷の間に入れることにした(図6)。

このシートを使用することにより、氷跡や氷焼けが軽減したことに加え、シートが氷の溶けた水分を吸収し保冷効果が向上し、水分を吸収したシートが膨らむことにより魚の箱立てが崩れないなどの効果もあり、市場関係者から鮮度や見栄えが良くなったとの評価を受けた。

さらに、佐須支所で平成10年頃からメンボ(ウマズラハギ)で行っている活魚出荷や出荷調整のための蓄養をアジ・サバでも試験的に実施した。

漁獲後、通常の活間では魚が壁面に衝突し衰弱するため、大量に活魚を運搬することが困難であったが、活間の栓を閉め、底部にはわせた塩ビ管数カ所から注水し、オーバーフローで排水するという方法で運搬したところ、活間一槽で100~120kg程度の活魚を運搬することができ、港内の生簀で10日間程度の蓄養が可能となり、市場の動向を調査しながら出荷できるようになった(図7)。

また、福岡市場に蓄養したサバを活魚出荷したところ、鮮魚単価が600~1,400円/kgの時に、活魚単価は、2~3倍の1,200~3,800円/kgで取引された。

5. 波及効果

漕ぎ釣り漁法は、漁具制作費が数千円／鉢と安価であり、島内で多数の漁業者が操業しているタチウオ曳釣りの自動釣り機を利用できる等の理由から、平成14年4月上旬現在、敵原町漁協全体で34隻、全島で100隻以上の船が漁法を導入し、島外へも波及している(図8)。

また、アジ・サバ以外の魚種を大量に漁獲したとの情報もあることから、操業方法や仕掛けを変えることにより、多種多様な魚種が漁獲できる漁法であると考えており、今後対馬の重要な漁業種類の一つになると期待している。

6. 今後の課題や計画と問題点

現在、対馬で漁獲される、アジ・サバは主に福岡、熊本市場に出荷されているが、一般消費者への周知がなされてなく、出荷市場が九州圏内に限定されている等、まだまだ「対馬ブランド」として我々が誇れるような魚にはなっていない。

今後、試験出荷による市場調査を行い、出荷体制を整備し、九州圏外への消費拡大を展開するとともに、市場関係者、消費者に対して、積極的にPRを行い、対馬産アジ・サバを、全国に誇れる「対馬ブランド」として出荷できるよう努力したいと考えている。

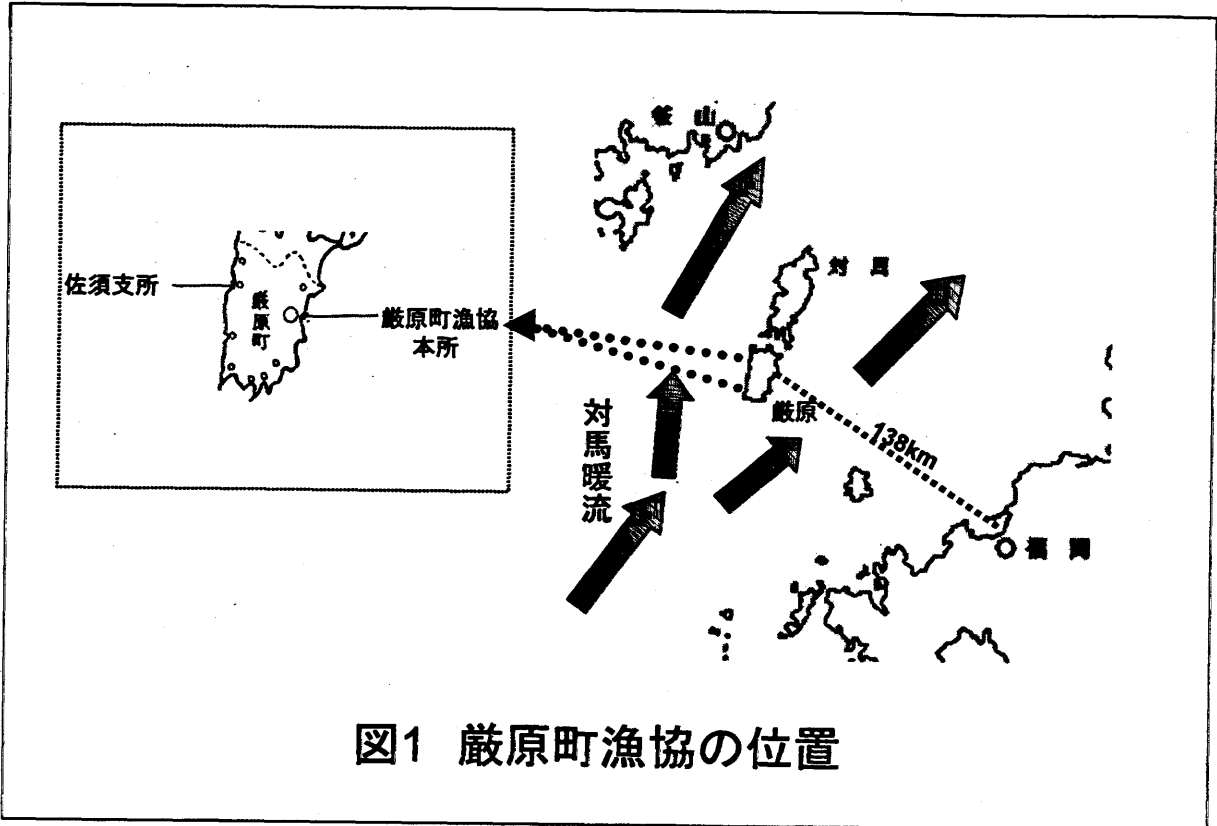


図1 厳原町漁協の位置

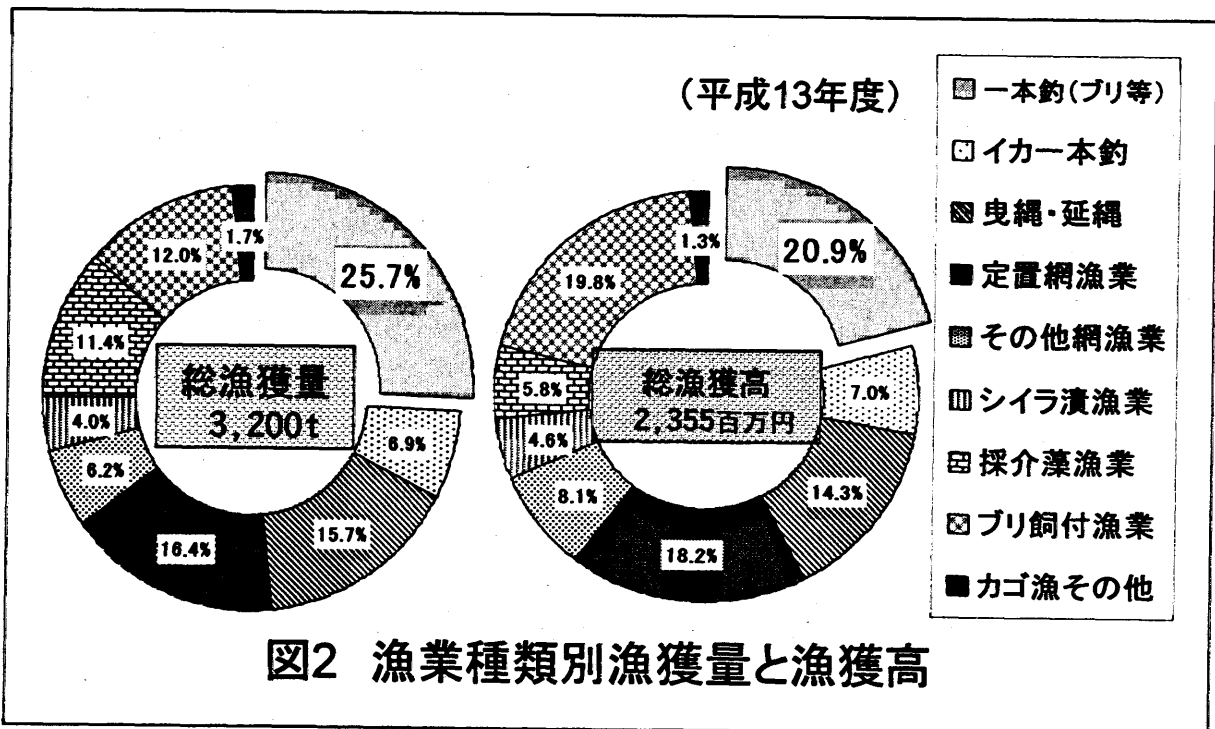
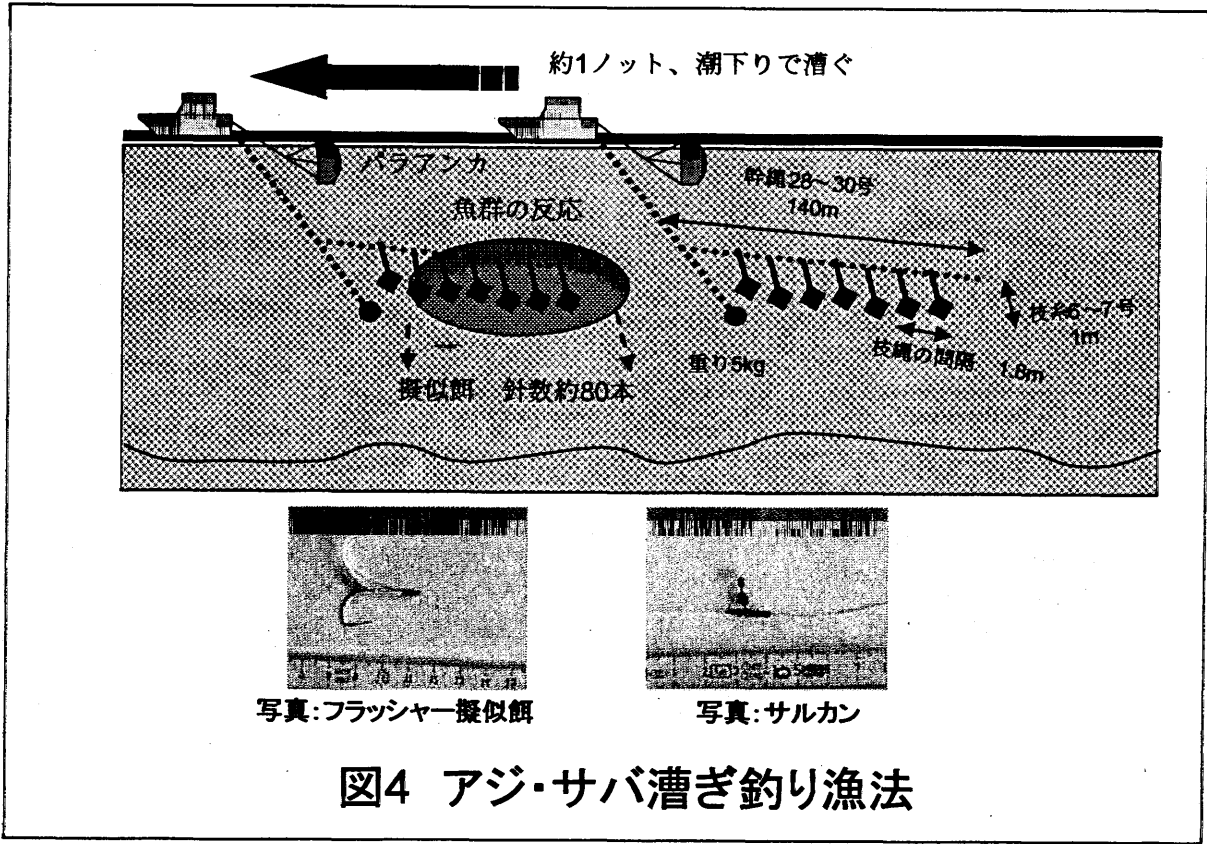
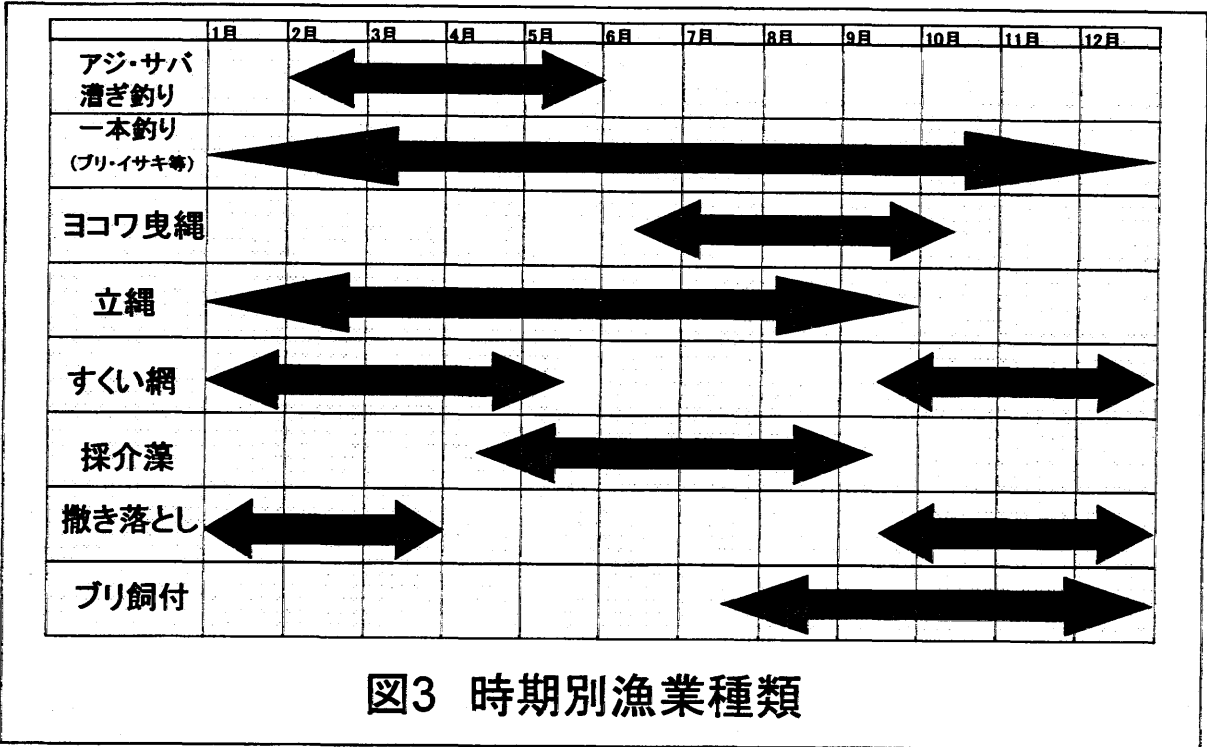
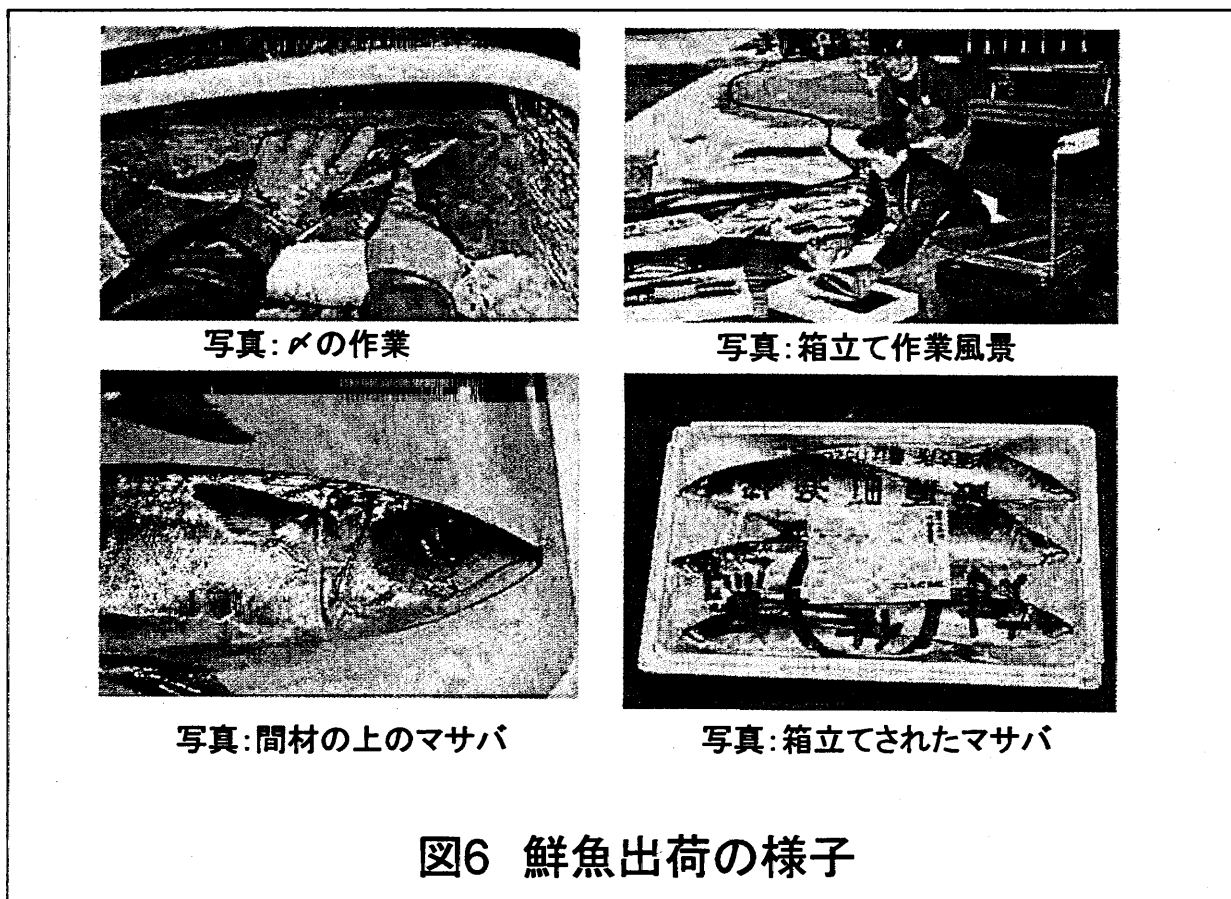
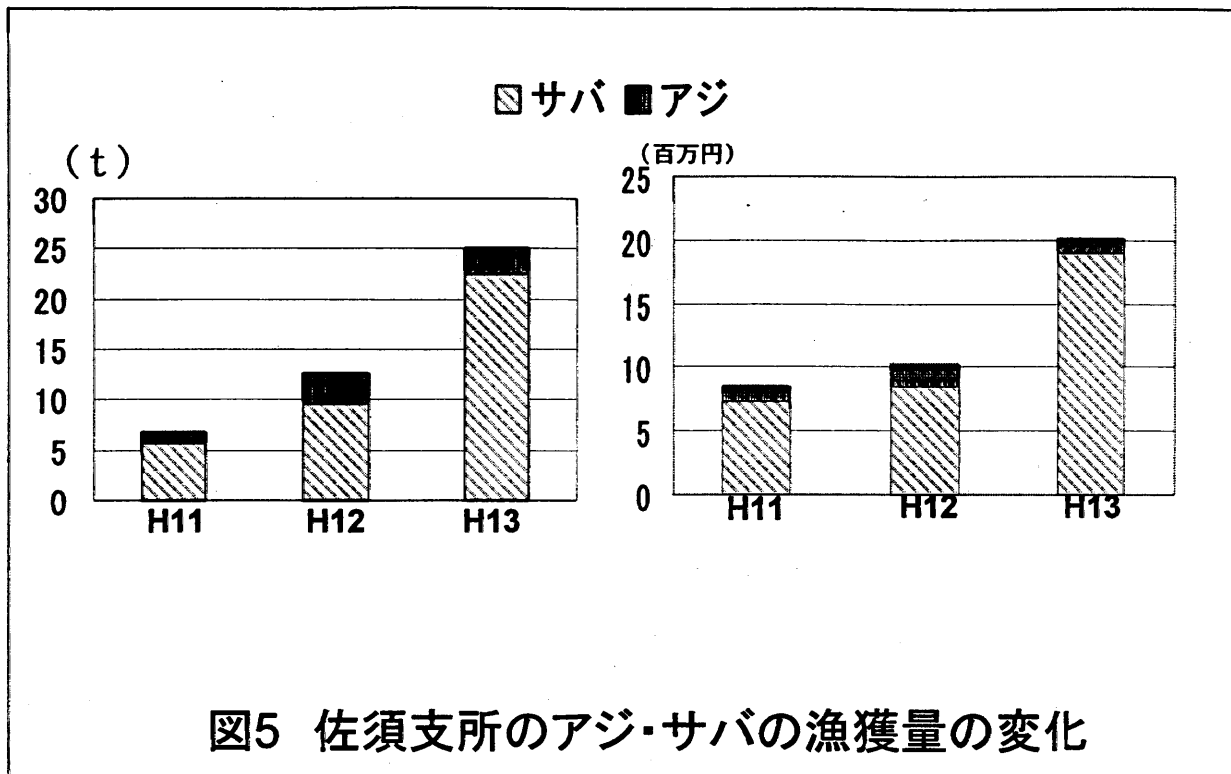


図2 漁業種類別漁獲量と漁獲高





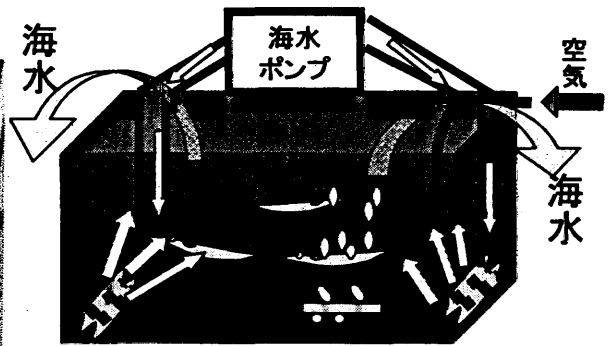
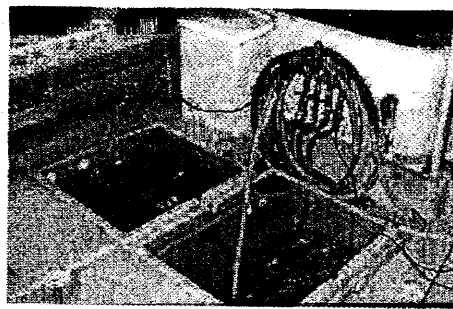


写真:改良した活間(底にはった塩ビ管から海水を注水し、上から海水を溢れさせる)



写真:蓄養生簀

図7 蓄養の様子

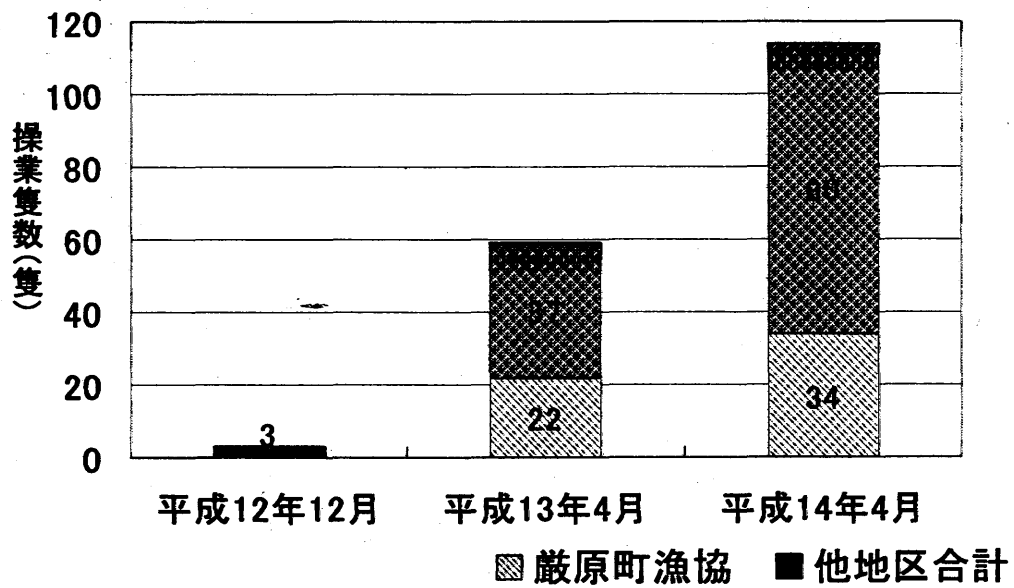


図8 対馬島内の導入隻数の変化